

■伝説の旅の、その続き
■住所の仕組み■氣候変動がもたらす脅威！■何かを通して地方を感じる■カケオくん四コママンガ

伝説の旅の、その続き、 辿り着いた場所とは



沢木耕太郎

沢木耕太郎の『深夜特急』に旅心を掻き立てられた読者は多いだろう。筆者もその一人。大学時代にちょうど文庫化され、文字通り貪るように読んだものだ。香港、マカオ、メナム川、バンコク、ペナン島、シンガポール、カルカタ、ブッダガヤ、カトマンズ、カブール、テヘラン、イスファハン、アンカラ、イスタンブール、アテネ、ペロポネソス半島、ローマ、フィレンツェ、モナコ、マルセイユ、マドリード、サグレス、パリ、ロンドン。沢木青年が辿った土地の名を書き写しているだけで、読んでいた時の興奮が蘇ってくる。

インドのデリーから乗り合いバスでロンドンを目指す、という酔狂な思い付きだったはずが、沢木さん特有の行き当たりばったりや紆余曲折を楽しむ精神と、あたかも旅の女神に祝福されているのと思えないような素敵な偶然や出会いも相まって、誰もが一生に一度はと羨む旅となった。また、それを書き留めた文章の見事さもあり、紀行のバイブル的存在へと昇華し

た訳だが、この旅には実は続きがあった…。

先頃発売となった『途上の王国』がそれである。雑誌連載から刊行までなんと三十年を要している。なぜか？話は『深夜特急』がドラマ化された九六年〜九八年へと遡る。企画の打診を受けた時点では映像化は難しいだろうと考えていた沢木さんは軽い気持ちで、もし撮影チームが無事ロンドンまで辿り着いたら出迎える」と口約束を交わす。ドラマは評判を呼び高い評価を受け、完結の運びとなる（今思えば大沢たかおもこの辺から変わり始めたのかもしれないが、それはまた別の話）。沢木さんはロンドンへ飛び、本編では使われなかったがロンドンの電話局へ入ろうとする大沢たかおとすれ違うというカメオ出演的な撮影も行われた。その際に、まさに旅を終えようとして

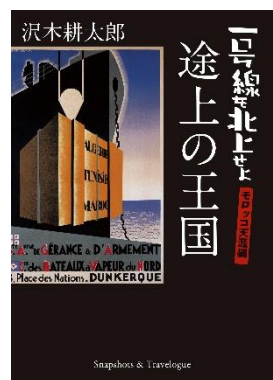
いる大沢からバトンを受け取るように「今度は私がその旅を引継ぎ、旅を続けることになったのかもしれない」という考えがよぎり、「このまま歩いて行けば、あの旅の続きができるのかもしれない」と思ったという。

沢木さんには心残りがあった。アフリカへ渡らなかつたことだ。ヨーロッパから西へ下つてきたヒッピー達からさんざんモロッコのマラケシュの素晴らしさを吹聴されていたし、タンジールもカサブランカも、そしてサハラ砂漠もある。どうしてあの時、海を渡らなかつたのだろうか？ロンドンで不意にバックパックを買い求めた沢木さんはその足でモロッコへ渡ることになるのだった…。

雑誌連載時のタイトルは「王国」であつたが、「これが真のタイトルではない」ということは、実はもう書いている途中から感じていた。「大げさに言えば、三十年近くタイトルを考え続けていたことになる」が、昨年ふと「途上」という言葉が浮かんできてタイトルが決まり、本を出そうという気になったという。本書の終わりにこんな一節がある。「王国とはそこに至ればすべてを満たしてくれると信じられていた土地のことのはずだ。しかし、たぶん、私たちはその王国にたどり着くことはない。私たちはただ王国へ向かう途上を生き延びるに過ぎな

い存在なのだ」と。そう、途上こそが王国なのだ！だから旅はやめられない。

⑧



小さな国家の 存在に驚く

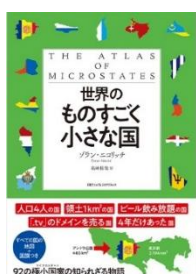
『世界のものすごく小さな国』で紹介されるのは「極小国家」と言われる国々です。明確に定義された領土を持つ、政府と社会秩序がある、主権がある、領土に国民がいる、などの条件を備えているものが国家で、面積が二五〇〇km²以下であれば「極小国家」としています。国家と名乗りながらも国際的に認められていないと「極小国」と分類されます。

バチカン、モナコ、トンガなど聞いたことがある国名はあるものほとんどが私にとって未知の国々でした。既に存在しない国はどのよう国が成立し滅び現在に何が残っているのか。存在する国々にも同様に国の特徴、成り立ち、地図、面積の表記、国旗付きと詳しく取り上げています。海拔が低く温暖化による海面上

昇の影響を受けやすいため人が住めなくなるのではと言われている国ツバル。このことで時々メディアに取り上げられるので私も知っている国です。観光業はアクセスが悪く発展が望めない、経済活動の中心が漁業と切手販売に加えてドメインが主な収入源になったという事実は初めて知りました。思ひもよらない生き残り策で驚きました。

私自身、「国家」という言葉を使つてはいても、「国家とは何か」を日々考えているわけではありません。とはいえ、本書はかつて存在した、あるいは現在も存在する小さな国に目を向けさせ、「国家」について考えるきっかけをくれる興味深い一冊です。

⑧



日本には 色んな境界線がある

大型連休中などに、他県の見慣れないナンバープレートを目にする機会は、誰にでもあることでしょう。では、日本にはどれほどのナンバープレートがあり、それぞれどの地域で使われているのか、ご存じでしょうか。

日本には、都道府県だけではなく、実にさまざまな「分け方」が存

在します。それは、歴史の中で生まれた境界線であったり、地域の文化から生まれた区分であったり、身近なものから「そんなものがあつたのか」と驚くような意外なものまで、多種多様です。

『日本の分け方』にはそんなさまざまな「境界線」が詰め込まれています。一方で、「県境未確定地域」のように、境界線が定まっていない地域も紹介されています。富士山頂などがその一例です。

さらに、自然によって生まれた境界線なども取り上げられており、雪国の境界線など雪国生まれでも知らなかった境界線も見つけられます。

読み進めるうちに、思わず地図を開いて確かめたいことになること間違いなし、日本の「分け方」を知って新しい日本の姿をご覧ください。



住所の仕組みを

知っていますか？

タイトルをみてどういう内容なのだろうなと思いつつ手に取った『ヤバい日本の住所』は、日本の住所の仕組みから始まった。住所は自分の所在地を表すものとしての認識しかなく、自宅は幸いなこと

に短く、ヤバくない住所のため小さい頃からそのままを素直に覚え利用してきたので、仕組みについて深く知ろうとしたことがなかった。

読みはじめは内容に理解が及ばず難しさを感じたが、読み進めていくと、奇妙な住所が奇妙になった背景などが明かされていき、驚きとどうしてそうなるのという困惑に陥る。そしてどんどん気になってくる日本の住所。

京都についても触れられていた。以前京都に数年住んでいたのだが、京都も独特な住所で上ル、下ルという文字がはいっていたり、道案内みたいな住所ではあるが、方向音痴の私にはそれで理解できることはなかったなと思いつつ、改めて京都の住所の仕組みをみて面白いと感じた。

場所によって、いろいろな変遷を経て地名へのこだわりや、分かりやすさを考えた結果現在の住所になったのであろうが、全国としての統一感はないため、データを管理するエンジニア泣かせなのだろう。

手紙やはがきを出すことが少なくなってきた現代ではあるが、それでも大切にされてきた地名の住所がヤバく残っていくといいと思う。



京都の旅は

別行動になる予感

京都観光が好きで何度も訪れています。言うまでもなく京都の歴史は深く、観光名所が数多くあります。そして、それぞれの空間的な位置関係だけでなく、時間軸が違い過ぎます。一度見ただけでは、想像力が追いつきません。だから、訪れる度に考えることが深くなっていきます。そんな京都への理解をさらに深くする為に、『地形』という切り口から学ぶ本が、『凹凸を楽しむ京都「高低差」地形散歩』です。

京都は（へり）が面白い。京都の名所旧跡は、山の裾野に多いとは思っていたのですが、その理由を歴史的な背景と地形的な特徴という観点から解説してくれます。挿入されているカラーの地図に断層の点線が入っているなど、細かいこだわりを感じて楽しめます。それにしても、京都駅付近の東寺から、約八キロ離れた下鴨神社まで、約三十五メートルの高低差があるとは！そりや高低差が無いと鴨川も流れないのですが、これはなかなかの勾配です。京都盆地の南北の地形など考えたこともありませんでした。

著者はNHKの番組「ブラタモリ」の案内を務めたことがある方で、『大阪高低差学会』という市民グループの代表。その道では有名な方ようです。そう言えば、タモリ

さんは（日本坂道学会）の副会長ということですが、こちらは、会員二名だったような。地形好きの皆さんの行動や考えることは似てくるというのでしょうか。

次の京都旅行は、明治時代に完成した南禅寺水路閣を見学するほか、北区大宮で豊臣時代の御土居の痕跡を探し、京都市内から（徒然草の第七段に出てくる）鳥辺野の煙が立ち上がる様子を想像するという何ともマニアな目的になりそうなので、同行者とは別行動になる気がしています。



平面地図では

分らないこと

東京の道はできることなら歩きたくない。迷った時のダメージが大きく感じるせいだ。約束の時間に間に合うようにと、気持ちに余裕がないうまま初めての道を歩くという記憶が積み重なっているからかもしれない。

ざっと道順を平面地図で眺めて頭に入れてから、今ならスマホの地図で道順に合わせて歩くこともできるが、それでも、高い建物だらけで見通しが悪く、やたらに坂道が続く。谷底に階段で降りてみたい：

なんてことは実際に歩いてみるまで分からないことが多い。普段過ごしている富山がなだらかな扇状地で高い建物が少なく、山で方角がすぐわかるような土地柄だから、余計に負担に感じてしまう。

東京スリバチ学会会長の著書『東京スリバチ地形大全』の二十三区東京スリバチMAPは、凸凹地形を立体的に可視化し、スリバチ上の窪地、湧水の源流部は点線で丸く囲ってある。

武蔵野台地の縁は崖の坂道だし、スリバチの周りは坂道だらけ、源流部は公園や神社の池だったり、というのが一目瞭然だ。

実際のスリバチ地点の写真と簡潔な周辺背景情報も添えられているので、行ったことのある場所の答え合わせができる感じが良く、今度訪ねる場所の予習にも使えそうです。



気候変動が

もたらす脅威！

地球温暖化が進んでいる。有識者によれば、二〇三〇年代には十九世

紀と比べて約1.5℃、二〇五〇年頃には約2℃まで温暖化が進むシナリオに近いらしい。このたった2℃の上昇がもたらすリスクを関山健さんの『気候紛争』が教えてくれた。

気候変動による災害は身近な物となっており、世界中で猛暑や熱波の被害が目立つ。気象災害と言われると、八月には千葉豪雨があり、富山・石川に「レベル5大雨特別警報」が出されたこともあり豪雨の印象も強い。

気象災害による紛争は特定の条件下でのみ発生する極端かつ稀な結果であると語られている。しかし、世界の平均気温が2℃上昇すると13%の確率まで内戦リスクが大幅に増大し、4℃の温暖化シナリオでは26%の確率まで増大すると予想されているという。気候変動は、紛争を直接招くというより、紛争の脅威を増幅するものとして捉えられるべきであるという話が腑に落ちた。

日本は気候変動の影響に対して比較的高い適応力があるという話は印象通りで、日本国内を考えると書名の『気候紛争』はあまりピンとこない言葉だった。著者は、「日本は、気候変動問題に対する関心が比較的低い国と思う」と語っており、政治経済リスクや紛争リスクを一人でも多くの方に考えて欲しいという理由で本書を執筆したとある。状況が進めば、もっと取り返しのない

かないことが起こるかもしれないと警鐘を鳴らしてくれた一冊だった。



「川ではない、滝だ」と言われる川の畔で。

四大文明が巨大河川の周辺で発生、発展したように、人類の生活は水環境を基に成り立つものである。しかしながら、人類は雨や河川に依存するばかりではない。『水の世界史』で描かれるのは、人類史に沿って流れる、人類と水環境との関係性の変遷である。

水が恵みをもたらすなら、それ自ら引き寄せようとするのが人の性。用水を引き、運河を通し、地図を書き換えていく。一方で、水環境は人類が引いた境界線を超越した存在でもある。上流から流れ、海にそそぐだけの水の流れに、個人や自治体や国家が正当な権利を主張するのは可能だろうか。また、水環境は時に深刻な災害を引き起こす。荒れ狂う暴流から生活を守るため、人類はダムや堤防など、さまざまな人工物を建設し、河川の流れすら書き換えてきた。

こうした水環境をめぐる問題は世界のいたるところ、いたる時代で

発生している。原因は地理的要因だったり政治的要因だったりするし、解決策も時代によって異なる。もちろん、その結末や影響も千差万別で興味深い。近代以降の「科学で自然を征服できる」という幻想の産物は、現代にも通ずる教訓や問題提起を得られるだろう。

さて、ここ富山はかなりバラエティ豊かな水環境が存在する。本書の内容のミニチュア版と言っても過言ではない。たまには、身近な水環境や、我々との歴史に思いをはせるのも興味深いものだ。といっても、酷暑の中、フィールドワークをする必要はない。その痕跡は紙の上に残されている。人と水との歴史とはすなわち、地図をどれだけ書き換えてきたかに他ならないのだから。



リアル冒険譚

本州から一二〇〇キロの絶海の孤島、本格調査は過去二度のみ、原生の生態系が残る奇跡の島、南硫黄島。

その三度目の調査に選ばれた鳥類学者、川上和人の著書『無人島、研究と冒険、半分半分』。これまで鳥類学そのものの著作が多かった川上先生ですが、今回は一冊丸々フィールドワークの本です。

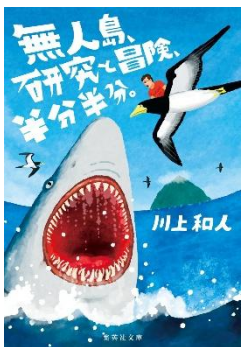
無人島といえば、「ロビンソン・クルーソー」のイメージでしたが、そんな甘いもんじゃなかった。

〈空気はハエでできている〉

〈固形の排泄物は持つて帰る〉

断崖絶壁だらけの島で、なるべく人の痕跡を残さない研究滞在は過酷で、困難と試練の連続。でも、その試練さえ楽しんでるように感じられるのは、その軽妙な語り口(?)が所以でしょうか。

研究者にとって、フィールドワークがこんなにもアドベンチャーなものだとは知らず、どんな冒険小説より面白く、興味深い一冊でした。



その場所で会いたい

世の中の大抵の人はそうであるように、美味しい料理を食べる事が大好きだ。時々必死に県内の飲食店の情報をかき集め、急に食べに行ったりもする。ただ、残念な事に何を食べても大体のものは美味しい。味音痴とも言え、こだわりのある料理人はさぞやがっかりするタイプの人間である。

雑誌「MOE」で連載していた小川糸著『食堂巡礼』が一冊の本になった。食を巡る十七編のエッセイが収

録されている。各店の料理の写真も載っており、食欲をそそる。料理の描写は言うまでもなく、食堂へと向かうまでの描写も秀逸で、まるで読者も一緒に向かっているようなワクワク感を募らせるところはさすがベストセラー作家だ。

しかし、この本について特筆すべきところは、料理人の生き様にも焦点を当てたところだ。

料理人へのインタビューで、何故この土地に根付いたのか、どのように生きてきたのかなどが語られる。いろんな料理人が登場するが、共通して感じるのは、豊かに人生を送っているという事。毎日が何かに追われるように生きている身からすると眩しく感じた。

きっとここに登場する人たちは、私のような味の違いのわからない人間でも美味しく食べていけば優しく受け止めてくれるに違いない。



何かを通して 地方を感じる

ここ富山県で過ごす私にとって富山弁は日常であるがゆえに普段

意識することはありません。しかしある日、家族や友人をスマホで動画撮影してみたところ、富山弁が浮き彫りになり、とても可笑しく、かわいらしく感じたのです。スマホを通してだけで地方を感じるこ

とができた瞬間でした。
今回紹介する本は、本を通して地方を感じさせる一冊。お笑い芸人、シンヌじろうさんの短編集『あの子が故郷に帰るとき』です。冒頭、女性の写真・名前・生年月日・出身地からはじまります。その人の人生の一片をストーリーにした一風変わった短編集です。

どの物語も文章を通して、色んな地方や国の風景と雰囲気とうまく表現されており、彼女たちの人生をリアルにイメージすることのできる作品です。著者のシンヌじろうさんは、普段から自身の地元青森県を大切にしているのを感じます。芸人という職業柄、地方に

行くことも多いのでしよう、そういった経験がこの作品に生きているような気がします。
訪れたことのある場所はどこですか？



あの子が故郷に帰るとき

シンヌじろう



世界遺産はどう決まる?

宮澤光・宮脇佳子

世界遺産とは、国際連合教育科学文化機関（略称：ユネスコ）で採択された条約に基づき登録された、「顕著な普遍的価値」を有する「文化遺産」や「自然遺産」であり、有形の不動産を対象とされています。文化遺産は

無形も含んでいると思っていまして、同じユネスコが制定する「無形文化遺産」や「世界記憶遺産」といった別の遺産事業になるようです。

『世界遺産はどう決まる?』では、書名の通り、世界遺産として登録されるまでの道のりや、実際に議論される世界遺産委員会の様子、日本で世界遺産の仕事をしている方のインタビューなどが掲載されており、現在世界で二百以上ある世界遺産についての歴史や問題点などがわかりやすく説明されています。

富山県でも五箇山の合掌造りが岐阜県の白川郷とともに世界遺産登録されています。遺産としての保存と観光事業との両立は大変だと思いますが、大切に維持されていくことを願います。

七月に開催された今年の世界遺産委員会で、奈良県（飛鳥・藤原の宮都）が新しく登録されました。五箇山・白川郷や姫路城などは訪れたことがあ

観たら／終わり

りますが、富士山や厳島神社など他の遺産にも一度行ってみたいですね。

二〇二六年上半期のホラー映画は秀作揃いであった。「口に関するアンケート」「氷血」「トウギャザー」「プリング・ハー・バック」「オプセシジョン 災愛」どれも涼しくなるには優れた映画である。

ホラー映画における日本とアメリカの違いと言えば、日本では女性から男性を襲う場合が多いが、アメリカでは男性から女性への場合が多いということだ。日本におけるホラーの造形は圧倒的に女性が多い。

お岩さんの頃からビジュアルの性別は変わらない。誰もが知るホラーアイコン貞子も然り。米国ではその逆で「13日の金曜日」「ハロウィン」「エルム街の悪夢」とそのビジュアルは男性。国や地域性で同じホラー映画というジャンルも大きく変化がある。

『ホラー映画超近現代史』は二〇〇〇年以降の海外ホラー映画を年代順に解説する。なぜ〇〇年代からなのか。八〇年代のホラー映画の栄光、九〇年代のサイコスリラーにとって代わられる挫折から〇〇年代はV字回復を遂げたためだ。フランスにおいてもホラー映画の隆盛は〇〇年代。フレンチホラーは三池

崇史「オーディション」の如くとも痛い。〇〇年代の代表作「ソウ」「ホステル」からも分かる通り、ホラー映画の復活劇は残酷な人間の死に様から始まった。

二〇一〇年代はホラーに社会要素が加わる。ソーシャル・スリラーと呼ぶもので、人種差別・ジェンダー・貧富の格差がホラーにおいて語られる。「バージ」は一年に一回十二時間のみ犯罪が合法化される社会を描く。圧倒的な暴力をもつ者が頂点に立ち、お金の有無は無関係だ。「ゲット・アウト」は黒人が優れた身体能力を持つと思われている人たちが、自らの人格を黒人に移そうとする。人種について描くホラーだ。

そして二〇二〇年代。SNSを始めとした個の時代においては、ホラーも個人に寄り添う。「サブスタンス」は年老いた女優が若さを求めたために破壊していく様を描く。ルッキズムやメールゲイズへの批判が込められていることを想像できる。

ホラーなんて怖いだけでしょうと思うかもしれないが、ホラーこそ社会を描き出す。ホラーは歴史を語る。ホラーは世界の縮図である。



ホラー映画超近現代史

ヒロシニコフ

